



創立90周年 教学改革で 国際レベルを 目指す

大阪医科大学 大槻 勝紀 学長



◎大学の歴史

本学は1927(昭和2)年創立。今年90周年を迎えます。

1920年代は昭和の大恐慌の中で多くの日本人が職を求めてアジアや南米へ渡った時期でした。その人たちが現地で診療する医師を確保するために、当時衆議院議員だった吉津氏が京阪電気鉄道の支援を受けて創設した「財団法人大阪高等医学専門学校」が始まりです。

建学の精神である「医育機関の使命は医学教育と医学研究であり、またその研究は実地の医療に活

と」がすべて完成する」という吉津氏の言葉は、私も大好きな言葉です。

現在は、創立100周年に向けてキンスの再整備も進行中で、本学附属病院の建て替えや「BNC T(ホウ素中性子捕捉療法)研究所」の建設なども予定しています。

8年前に看護学部が併設されました。昨年は大阪薬科大学と法人合併し、大学統合も計画中です。将来、医学部、看護学部、薬学部をそろえた医療系の総合大学としての機能を充実させていきたいと考えています。



中央手術棟

◎中央手術棟が完成

昨年3月新たに中央手術棟を開設し、高度先進医療のセンターとして臨床と教育を行っています。

中央手術棟には、CT、ハイブリッド手術室、アンギオハイブリッド手術室、バイオクリン手術室、手術支援ロボット「ダヴィンチ」を導入した手術室を完備しており、中央手術室16室、日帰り手術室4室、ICU16床、胸部外科および消化器外科病棟からなります。

日帰り手術室は、手術当日外来を経由せずに直接手術室に入室が可能です。

24時間体制で断らない手術室をモットーに、医師、看護師、薬剤師、臨床工学技士、中央材料物流、清掃事務職員でチーム医療を実践しています。

◎BNC T施設の建設

国家戦略特区として、本学敷地内にBNC T施設を建設することが決まりました。

夢の治療法とも呼ばれるBNC Tは、がん細胞にのみ浸透するホウ素製剤を患者の体内に注入し、そこに中性子を当てると、正常な細胞にダメージを与えずに、がん細胞を死滅させることができる治療法です。

重粒子線治療は体の深部にあるがん治療に有効だとされています。BNC Tは、乳がん、胸壁側にできた肺がん、脳腫瘍、頭頸(けい)部がんなど、深さにあるがんにも有効です。

京都大学、大阪大学、大阪府立大学の3大学とタッグを組み、基礎研究や治療の拠点として運営する予定で、2019年の夏をめどに稼働します。

◎エスワリの利いた 医療人育成

私が広報・入試センター1長になった2007年ごろ、本学の入試志願者数は1000人程度でした。受験倍率は約10

倍。幅広く人材を集めるために広報活動に尽力してきました。その結果、11年間連続で志願者数が増加。今では、日本全国から約3500人が本学を受験してくれるまでにになりました。

2016年度の私立大学医学部偏差値ランキングで全国4位、西日本では1位を誇っています。

学長として目指すのは「エスワリの利いた医療人を育成すること。医療の腕は確かであり、サーチャイブを持ち続けている医療人を意味します。

臨床研究をする中で、エスワリを常に持ち続け、社会に貢献できる医療人を育成するために、さまざまな疾患の検査、治療薬品の開発を、企業と共同で進めているところだ。

小児心臓外科の根本慎太郎教授は、小説「下町口ケットの医療器修に携わり、ニトト生地製造会社」「福井経編興業(福井市西開発)高性能繊維やルスカア事業を手掛ける」(帯人)大阪を中央区と新しいタイプの心臓修復パッチの開発に取り組んでいます。

新生児の心臓手術では、心臓が発育するにつれ装着したパッチが引きつれを生じるため、再手術が必要になります。そのため、手術を一度で終わらせることができるよう、自己組織に置換される、伸長可能な心臓修復パッチをつくらうとしているのです。

その他にも本学の臨床の先生方はたくさんいらっしゃいます。今後はそれらを商品化し、なげられるよう、幅広い研究を推進してきたいと思えます。

◎学生の国際交流

医学教育、研究、技術の国際交流を目的として、1998年、本学の先輩である中山太郎元外務大臣の肝いりで中山国際医学医療交流センターを本学内に設立しました。

このセンターは、海外の10の大学、研究機関、病院などとMOU(国際交流協定)を結び、学部学生同士の交流や、大学院生や教員による手術や技術をはじめとする学術交流、JICA(国際協力機構)への協力などをしてきました。



アムール医科アカデミーでの学生交流

「教育研究集会を年に2回開催しており、学生も多数参加しています。この集会では、学長が教育方針、研究方針を示し、半期ごとの進捗(しんちよく)状況などを報告します。それについて意見を求め、話し合うことにより、風通しの良い大学にすることが目的です。

私の学長就任祝賀会で「日ごろから懇意にしていた近畿大学の塩崎均学長に、ごあいさつをいただきました。そのとき言われたのは「学長は1歩、2歩前に出た方がいい。半歩だけ前に出よう。それは常に背中のみならず、意見も聞きながら進めよう」という意味でした。

あまり前に出すぎると、みんなの音が聞こえなくなる。自分勝手にやっても誰も聞いてくなくなります。広く意見やアイデアを聞きながら、私の考えを理解してもらい、最後には私が決断する。それくらい心の余裕を持って、これからは学長職を務めていきたいと思えます。

◎教職共同と情報共有

かつての医学部では、職員は教員に言われたことだけをやるという指示待ちの風潮がありました。しかし、そんな受け身の姿勢では良くない。現状改善のために、教職協働の多職種連携に力を入れていきます。

情報共有を図るために、各種委員会では、テーマにふさわしい資料を職員自身が考えて事前に準備してもらい、当日、職員からも必ず意見を求めるようにしています。円滑に双方のコミュニケーションができるようにしていきたいです。

また、FAC(Really Development)のSAC(Staff Development)を合わせた

大阪医科大学
大阪府高槻市大学町2-7
☎072-683-1221(代表)
http://www.osaka-med.ac.jp/

